

でんでら通信 第百十七号 令和六年一月

新年あけましておめでとございませう

日ごろは当禅林寺に対し御法愛を賜り誠に有難うございませう。本年もよろしくお願いいたします。

坐禅会

一月二十二日(月)十時に坐禅会を開催します。みなさんのご参加をお待ちしております。

檀家総会

令和六年二月十八日(日)午後二時より、当寺本堂にて三年に一回の檀家総会を開催します。

たつ年に因んで

本年は、たつ年(龍年、竜年、辰年)です。お寺と龍はひじょうに縁が深い関係にあります。

お釈迦さまがお生まれになられた時には、二匹の龍が現れ、清浄水を濯(そそ)いで祝われたといひます。また悟りを開かれる七日間の瞑想時には、激しい暴風雨が吹き荒れる中、龍がお釈迦さまの体に巻きつき、頭を傘のように広げて護つたといひます。

臨済宗の各本山には、法堂の天井に龍が一面に描かれています。お堂のどこから見ても、こちらを覗(にら)んでいるように見えることから、「八方にらみの龍」と呼ばれます。

ではどうして龍が天井に描かれているのでしょうか

か。

それは、龍が水の神さまの化身であるという云われからです。そもそもお堂というのは、木造で建てられています。その木造である建築物にとって一番の心配は、火災であります。そこで水の神さまの化身である龍を天井に描き、「火伏(ひぶせ)の龍」として護っているのです。

また龍は十二干支の中で唯一、実在しない架空上の動物です。

角は鹿、頭は駱駝(らくだ)、目は鬼、首は蛇、鱗(うろこ)は鯉、爪は鷹、掌は虎、耳は牛といわれます。そしてその鳴き声は、雷雲や嵐を呼び、やがて竜巻となって天空に昇ります。



この通信でも度々紹介しています禅宗の書物「碧

巖録」第七則には、

三級浪高うして魚龍と化す

という禅語があります。

(訳) 激しい三級(三段)の滝を乗り越えて、魚は龍となる。

古代中国の舜(しゆん)皇帝は、家来に黄河下流で氾濫による災害が多いため、治水工事を命じました。そこで家来は黄河の上流である龍門山を切り崩し三段の段差をつけて水を通し、難工事を成功させました。この三段の段差により、三つの滝ができました。この滝を龍門三級の滝と呼びました。

毎年桃の花が開くころ(日本の端午の節句)に多くの魚が黄河を上って龍門山下に群集し、龍門三級の滝を上ろうとします。しかしおおかたの魚は失敗に終わってしまいます。ところが、ごく稀に上り切ることができた魚は、頭上に角が生え、尾を上げた龍となって雲を起(こ)し天に昇った、という神話からこの禅語が生まれました。

つまり「ひとつの関門(限界)を突破することにより、自らが新たな境地に至ることができる」ということとです。

そして、そこから立身出世のための難関を「登竜門」と呼ぶようになったそうです。このことから、特に魚類の長である鯉が龍になるという伝説が、立身出世、登竜門、端午の節句の鯉のぼりの語源といわれます。人生には、難問や試練である滝(困難)があります。まずはチャレンジすることです。何事もやる気次第です。そうすれば、やがて龍となって夢がかなうことでしょう。たとえ三日坊主となったとしても、です。